

# 人類学者は世界を救えるか ——ライラ・アブー＝ルゴド『ムスリム女性に 救援は必要か』を読む——

小 栗 宏 太

ライラ・アブー＝ルゴド著、鳥山純子・嶺崎寛子訳『ムスリム女性に救援は必要か』  
書肆心水、2018年。

(原著：Lila Abu-Lughod, *Do Muslim Women Need Saving?* Cambridge, MA: Harvard  
University Press, 2013.)

『ムスリム女性に救援は必要か』という本書の標題の問いを、あなたはどうか受け止めるだろうか。本書の日本語訳を手取る読者の多くは、ムスリムではないかもしれないし、女性でもないかもしれないが、それでもおそらくは女性をめぐる社会の問題、特にイスラーム世界のそれに関心のある人だろう。あなたは、しばしば報道されるムスリム社会の女性をめぐる悲惨な事件などを思い浮かべ、「必要に決まっている、世界の女性に手を差し伸べるべきだ」と感じるだろうか。あるいは反対に、歴史的に「ムスリム女性」に向けられてきた他地域からの偏見と、それに立ち向かってきた当事者や専門家たちの努力を想起<sup>1)</sup>し、「未だにこんな問いがまかり通るのか」と憤慨するだろうか。どちらの立場でも、この本はあなたのための本だ。あるいはそれほど強い意見を持つまえに、本書の原書をはじめて目にした時の私のように、この問いのもつ論争的・挑戦的な語気につまずき、開くのを躊躇してしまうかもしれない。この本はきっと、あなたのための本でもある。

実際、本書は間違いなく挑戦的な書だ。標題の問い、といったが実際には「果たして本当にムスリム女性に救援が必要なのだろうか」というレトリカル・クエスチョン、すなわち反語と呼んだ方が正確だろう。この標題への「長い回答」<sup>2)</sup>とされる本書のなかで、筆者は、「ムスリム女性は抑圧されているから救ってあげなければならない」という主張を明確に批判している。しかし、本書は決して「イスラーム世界の女性は問題など抱えていない」と訴えるものではない。また、ムスリム女性が自らの信仰を擁護する観点から書いた本でもない。

ライラ・アブー＝ルゴドは、社会史学者であるアメリカ人のジャネット・アブー＝ルゴドとパレスチナ出身の政治学者であるイブラヒム・アブー＝ルゴドとの間に生まれたアメリカの人類学者である<sup>3)</sup>。エジプトを主なフィールドとしており、女性を主な対象とした民族誌である *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society* (1986年、日本語未訳)、*Writing*

*Women's Worlds: Bedouin Stories* (1993年、日本語未訳) やエジプトのテレビドラマを扱った *Dramas of Nationhood: The Politics of Television in Egypt* (2001年、日本語未訳) などの単著を出版している。2013年に原著が出版された本書も調査の中で接した女性たちの経験を題材に、学問的、人類学的な知見に基づいて書かれている。

本書の標題が「イスラーム世界の女性は問題など抱えていない」という主張として誤解される可能性を、筆者はしっかり認識していたようだ。そのような読者の反応を見透かしたかのように、本書の序文の冒頭は、ザイナブというインフォーマントのひとりとの印象的な会話からはじめられている。エジプト南部の農村に住むザイナブと筆者はすでに何十年ものつきあいになる長い知り合いで、話をしているうちに今の研究テーマの話になったという。欧米の人々がどうして「ムスリム女性は抑圧されている」と信じているかについての本を書いている、と筆者が説明すると、彼女は「でも実際、女性たちは抑圧されているじゃない！色々な意味で権利がないし、職場でも、学校でも、それに……」と反論したという。その剣幕に驚いた筆者が「でもそれは、イスラームが原因？」と尋ね返すと、今度は彼女が驚き、「え？そんなわけじゃない！それは政府のせいよ」と話した、という<sup>4)</sup>。

このいささか出来すぎの感すらあるエピソードに示されているように、「ムスリム女性は救援を必要としている」という態度について彼女が第一に批判するのは、「ムスリム女性」という主語でもってムスリムとしての信仰をもつすべての女性が集合的に語られていること、さらにはそれによって、彼女たちの抱える全ての問題が「イスラーム」に帰されていることである。序文の続きや、本書の最後の2章である第5章『「ムスリム女性の権利」の社会生活』と第6章「権利という領域のただなかに、人類学者として」の中で、筆者は自身のよく知る女性たちの生活を通してそのような語りの問題点を追求していく。たしかに彼女たちは様々な困難をかかえているが、それはグローバルな経済や政治体制や家庭内暴力などが複合的に絡みあったもので、彼女たちがムスリムであることのみによって説明できるものではない。筆者は英語圏の読者に、そのような説明の不合理を証明するために、キリスト教徒やユダヤ教徒の女性について標題の問いが成り立つかを読者に問いかけているが、同じことは「日本女性」を主語にしても言えるだろう。今日の日本において、女性が女性であるがゆえに経験する日常の様々な場面での苦難の存在は否定できないものだが、それをもとに「日本の文化は女性を抑圧しているのか」と問われたらどう感じるだろう。「日本の文化」とは一体何のことを指すのか、この場合の「女性」というのは一体どのような立場の女性か、「抑圧」とは何を指すのか、どのような基準でそれを測るのか、そして何よりこの問いに「Yes」と答えたところで自分の苦しみは解決するのだろうか、と様々な疑問が浮かぶだろう。

しかし中東の女性、「ムスリム女性」に対しては、すべてをイスラームの「文化」で説明しようとする「文化起因論」(cultural explanation) がまかり通ってきた。筆者は、特に第1章「ムスリム女性に(いまだに) 救援は必要か？」や第2章「新たな常識」において、特に9.11以降の西洋社会におけるムスリム女性をめぐる様々な言説(政治家の発言や、ムス

リム女性の抑圧・虐待をとりあげるノンフィクション)を題材に、ムスリム女性が単一の「イスラーム・ランド」とでも言うべき世界に属する人々として単純に表象されていることを丹念に検討し、そこで実際に問題にされているのは「どのムスリム女性なのか」<sup>5)</sup>を問いつ返している。このような文化起因論は、中東のみならず、他の非西洋地域における女性や性的マイノリティの人権問題を語る際にも、しばしば用いられてきた。人権推進派は文化を普遍的な価値観たる人権と対立する個別的な価値観として糾弾し、反対に非西洋諸国の権力者や保守派は同様の図式を用いて人権概念の推進を自国の文化に対する西洋諸国の文化帝国主義的侵略として批判し、文化の名の下にマイノリティへの暴力を正当化してきた<sup>6)</sup>。この極端に単純化された二項対立の中で、文化相対主義を掲げる文化人類学者たちは、後者の擁護者として認識されることもある。本書にも言及されている法人類学者のサリー・メリーは、人権概念が個別の文化と調停される場面を丹念に取材してこの二項対立を批判した著作の冒頭で、パレスチナにおける強姦事件について取材を受けた際、文化の観点からそれを擁護してくれないか尋ねられ、断ったところ、「他にそれをしてくれそうな人類学者はいないか」と尋ねられた経験について書いている<sup>7)</sup>。「文化に抗して書く」ことを主張するライラ・アブールゴドの本書における主張は、そのような誤った「文化」理解に異議を唱えるものである。一般に語られる「文化」を「世界のこの地域の人々の苦しみの源やその性質を真摯に理解しようとするときの障害にしかない<sup>8)</sup>」と批判し、この大きな語りからこぼれおちる人々の個別の生に向き合うことを主張する彼女の立場は、人権推進派／文化相対主義者という誤った二項対立のどちらにも当てはまらない。

「ムスリム女性は救援を必要としている」という言説について彼女が第2に批判するポイントは、それが、その背景に、彼女たちを救う側の「私たち」の世界の優位性についての認識を含んでいる点である。「救援」が単なる「支援」(helping)ではなく、いささかキリスト教的な含みもある「救い」(saving)であることを意識すべきだろう。「イスラーム・ランド」から女性を救う(save “from”)という思想は暗に彼女たちをどこかに救い上げる(save “to”)という思想を伴っている、と彼女は主張する。第3章「道義的十字軍の認可／権威づけ」および第4章「『名誉犯罪』の誘惑」で筆者はこのような「救い」の物語を丹念にとりあげ、その危うさを批判する。女性を救うという思想は、アメリカ国内においてはブラック・フェミニズム、国外においては第三世界フェミニズムが批判してきたように受動的に救われる立場におかれる女性たちのエージェンシーを奪ってしまうだけでなく、救う側の自社会の優位性を担保するという点において保守主義的、国粹主義的、帝国主義的な言説とも非常に相性がいい。アブールゴドは、9.11後の中東女性をめぐる言説のなかに、保守的言説へのムスリム女性問題の動員を察知し<sup>9)</sup>、中東の女性の権利に気を配るフェミニストたちに対して「得体の知れない同盟相手への猜疑心を持つ」<sup>10)</sup>こと、すなわち「自分たちが支援しているもの(と支援していないもの)をしっかりと見据え、その理由について注意深く考え[る]」<sup>11)</sup>ことを訴えかけている。このような批判は、クィア理論、批判人種理論などそれぞれ

れの立場から繰り返し行われてきたリベラルなセクシャリティ／人種言説の既存の権力機構への取り込みの批判<sup>12)</sup>ともつながるものだろう。

そのような意味で、9.11以降の中東政策が念頭におかれているという点でも、アメリカにおけるラディカルな政治理論による批判の視点が踏襲されているという点<sup>13)</sup>、アメリカ政治の特別な文脈の中で書かれていると言える。幸いに邦訳では固有名詞等について豊富な訳注が付されているので<sup>14)</sup>、9.11直後のアメリカに固有な人名や用語についても、理解に困ることはそれほどない。しかし、邦訳が出た今となっては<sup>15)</sup>、議論そのものにいささか時代遅れの感もある。本書は、邦訳の帯にも引用されているように「リベラル・ファンタジーの批判」である。このような状況は、中東に対する強行的な政策にムスリム女性問題を動員したブッシュ政権下、あるいはリベラルな価値観を外交問題においても強調してきたオバマ政権下においては説得力を持つものであったかもしれない。しかし、トランプ政権下のアメリカの保守はそのような擬似リベラル的レトリックを、建前としてすら必要としなくなったかのように見える。リベラル的理想が保守主義／自国ファースト主義の興隆の中で説得力を失いつつあるように見える昨今の政治事情の中では、本書におけるはげしいリベラリズムの批判は、「そうだムスリム女性のことなど放っておけばよいのだ」という無視・無関心を助長する結果にならないだろうか。もちろん筆者はリベラリズムの方法論を批判する一方で、その「世界をより公正な場所にする」という目標については共有することは再三強調している。しかし、保守の側からのリベラリズム批判の文脈で読まれる可能性に対しては、有効な配慮をしているようには思えない。

「リベラル・ファンタジー」の批判であるという点が、本書の価値であり、限界でもある。反対の立場から「リベラリズム」を批判する人々に対して、彼女やラディカルな左派<sup>16)</sup>はいったいどう答えるのか。本書には有効な回答は示されていない。アメリカにおけるリベラリズムをめぐる議論の文脈を必ずしも共有しない日本において、ましてや本国ですらリベラリズムが説得力を失いつつあるように見えるこの時代にこの本を読むには、批判の矛先がどこに向けられているかについて、ことさらに当時の文脈に注意を払うことが求められるだろう。

もちろん、ここで提示されている批判の枠組みは、別の文脈に照らし合わせて読まれる可能性を阻むものではない。日本の文脈でもインバウンドなどに関連した経済的需要の増大などを受けて、イスラームやムスリムを解説する言説が増加しつつあるように見える昨今、本書は集合的な語りの内容について批判的に検討する視座を提供することができるだろう。また、本書が指摘する「救済」の物語の問題点についてはイスラームや中東を越えた普遍性を持つものである。評者自身、まったく異なる文脈でこの本に触れた。原書が出た2013年当時、評者はアメリカの大学院で政治学と女性学／ジェンダー学を学ぶ学生だった。当時のアメリカで「LGBTの権利に関心があってその勉強をしにアメリカに来た」というと、独特の満足げな笑みとともに「あなたの自分の国では難しいでしょうからね」と言われることが

あった。LGBTをめぐる議論／研究において当時のアメリカはまちがいに「進んだ」地域であったため否定することもできなかったし、その発言にこめられた哀れみも善意からくるものであることはわかっていたが、なんとも言えない居心地の悪い気持ちを抱いていた。そんな中で出会った本書による「救済」のレトリック批判、特に救う地域 (save “to”) と救われる地域 (save “from”) という関係性に埋め込まれた権力構造の分析は、図らずも「救われる」立場に置かれたそんな違和感を言語化し、LGBT言説における欧米中心主義批判をまとめる助けとなった<sup>7)</sup>。

一方で評者は同じ留学時代、このレトリックの反対側に立つ居心地の悪さも感じていた。当時出席していた女性学のクラスで、多種多様な背景を持つ女子学生たちが語る女性たちの問題について、ほぼ唯一の男子学生である自分がどのように語るべきなのかわからなかったのだ。その当惑は、本書の問いをつきつけられ、「ムスリム女性」について、非当事者としてどのように語るべきか困惑する人々の心情にも重なるものだろう。私たちは、「彼女たち」の苦しみについて、どのように関心を持つべきだろうか。

本書は一見、他者の問題に気を配る人々を単純に批判しているようにも思えるが、実際には筆者はそんな「善意の他者」との対話を試みている。それは筆者の代名詞の使用にも現れている。既に述べたように、彼女は本書を北米／西洋の文化人類学者として書いており、北米／西洋の読者に呼びかける際に「わたしたち」(we)を使い、一方で調査地のムスリム女性について語るときには、それが自分の親族であったとしても必ず三人称を用いている。彼女の主張の根拠となっているのは、自らが中東にルーツをもつ当事者であることではなく、あくまでも人類学者として「他者」であるムスリム女性たちによりそったことである。それは、自らの経験を拡大して「私たちムスリム女性」全体に投影しようとする様々な(元)ムスリム女性の大きな1人称の主語を用いた語りを批判的に検討する彼女の態度とも無縁ではないだろう。

このことは「ムスリム女性」ではない読者、この表題に戸惑いを覚えた善意の他者である読者、アブー＝ルゴドが「私たち」という言葉を用いて呼びかけようとした読者にとっても福音となるはずである。彼女は本書を、そんな読者とは異なる立場から書いているのではなく、元は同じ立場だったが、人類学者としての研究を通じて「彼女たち」の抱える問題を理解するようになった人間として書いている。だから彼女が読者に勧めるのは、他者への関心を捨て沈黙することではなく、自分が人類学者として行ってきたのと同じようにすること、すなわち当事者のことを「よく見てよく聞く」こと、そしてそれによって自分が救おうとする他者の問題をより深く理解することである。

本書には地球上のどこかの女性の苦痛について耳に優しい書籍にありがちの『今から10分でできる4つのステップ』は載せていない。本書で私が語った物語や発展させた分析は、お手軽な解決法や簡単な回答などはないことを示している。もし何か代替案を

示せと迫られたら、私は多分次のようにアドバイスするだろう。よく見て、よく聞きなさい。広い視野を持ってしっかり考え、責任を引き受けなさい、と<sup>18)</sup>。

自己と他者の違いをはっきりと意識し、それを前提にすることで深い他者理解を目指すという文化人類学の古典的な試みは、アブー＝ルゴド自身も行ってきたように表象の政治批判の文脈で批判を招いてきたが、本書の試みは、「人類学者のように考える」ことが大きな主語による語りに再考を迫り、そこからこぼれ落ちる生に焦点をあてるという良心的な機能も持っていることを示している。

かつて上野千鶴子は、フェミニストの視点から人類学批判を試みた著作『女は世界を救えるか』のあとがきの中で、表題の問いについて「男に救えない世界が、女に救える道理がない」と書いた上で、フェミニズムには「女は世界を救う」というような「らちもない夢想」ではなく「強靱な知性に支えられた醒めた理想主義」が必要である、と述べた<sup>19)</sup>。「ムスリム女性を救う」という思想のあやうさを指摘し、個々の女性たちの問題に効果的に向き合うための人類学的アプローチを提言する本書は、まさにそんな「醒めた理想主義」の一例だろう。事実、序文において、アブー＝ルゴドはこう書いている。

女性にとってより良い世界を望むなら、理想主義的であろうとも、道徳的、政治的理想を目指さなければならない。しかし、女性に対するひどい抑圧の典型例や格好の事例とされてきた女性たちと暮らしてきた研究者として私は、女性の苦しみの本質および原因を分析する際には慎重でなければならないと主張したい<sup>20)</sup>。

本書におけるアブー＝ルゴドの主張は、公正な世界をめざすフェミニズム、リベラリズムの高邁な理想主義を完全に退けるものではなく、その理想のためのより有効なアプローチを提案する副読本として読まれるべきものである。その点において本書におけるリベラル・ファンタジー批判は、誰かを救おうとする理想を持つ人にとってもある種の「救い」をもたらすものであり、故にリベラリズムが危機を迎える昨今の政治状況においても依然として読まれるべき価値のある一冊に違いない。

他の人間に救えない世界を、人類学者が救えるのかはわからない。しかし本書は少なくとも「世界を救う」という理想に対して、人類学者ができる貢献の形を示している。

## 註

- 1) そのような文献は日本語に限っても枚挙にいとまがないが、比較的新しい簡潔なまとめとして、ライラ・アブー＝ルゴドと同様にエジプトの特に女性を研究対象とする人類学者である両訳者による論考を参考されたい（田中雅一・嶺崎寛子「序：《特集》ムスリム社会における名誉に基づく暴力」『文化人類学』82巻3号、2017年、311-327頁。鳥山純子「ジェンダーから考えるイス

- ラーム：女性にとっての『良い・悪い』の議論を超えて」小杉泰・黒田賢治・二ツ山達郎編『大学生・社会人のためのイスラーム講座』ナカニシヤ出版、2018年、203-219頁）。
- 2) ライラ・アブー＝ルゴド著、鳥山純子・嶺崎寛子訳『ムスリム女性に救援は必要か』書肆心水、2018年、228頁。
  - 3) 筆者の来歴については以下の書籍の訳者あとがきに詳しい。ライラ・アブー＝ルゴド編、後藤絵美・竹村和明・千代崎未央・鳥山純子・宮原麻子訳『「女性をつくりかえる」という思想：中東におけるフェミニズムと近代性』明石書店、548-553頁。
  - 4) 『ムスリム女性に救援は必要か』、11頁。
  - 5) 同上、90頁の見出し。翻訳では「ムスリム女性とは何か」と訳されているが、原文は「What Muslim Women」である。これを含め本書には、見出し・本文にいくつか邦訳の妥当性に疑問がある箇所が散見される。例えば、45頁には、文化起因論について「CIAが資金源となって作り上げた」との記述があるが原文には該当する箇所はなく、なんらかの編集上の手違いだろう。64頁には「彼女たちのヴェールはそのままに、他者の救済という幻想は捨て去られるべきだというのが私の見解である」とあり、これはおそらく筆者の主張とも合致しているものの、原文は“*It seems to me that it is better to leave veils and vocations for saving others behind.*”（原著 p. 49）であり、ここでは「ベール」と「女性を救うという天命」の両者から一旦離れ、別の議題にうつることを主張しているに過ぎない。また、女性による印象的な祝婚歌についての142頁の「彼女たちが一族の花嫁を誇らしげに言祝ぐ祝婚歌の多くでは、夫婦は敵対するジェンダー・イメージで描かれる」という記述については、「夫婦」にあたると思われる原文は“*a couple of*”であり、これは文字通り「2つの」の意味であろう。実際にここでは2つの歌の歌詞が紹介されているが、それは夫婦ではなく、花嫁の姿を大空を舞う自由な鳥にたとえて描写したもので、筆者はこれを、既存の「囚われた籠の中の鳥」というムスリム女性のステレオタイプに対する「敵対的なジェンダー・イメージ」(an adversary gender image)として提示している。これらを含めたいくつかの点について評者はすでに両訳者に連絡をとった。改訂等の際に修正されることを希望する。
  - 6) Sally Engle Merry, “Human Rights Law and the Demonization of Culture (And Anthropology Along the Way),” *Political and Legal Anthropology Review* 26(1), 2003, 55-76.
  - 7) Sally Engle Merry, *Human Rights and Gender Violence: Translating International Law into Local Justice*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 2006, 7.
  - 8) 『ムスリム女性に救援は必要か』、45頁。
  - 9) 同様に9.11以降のアメリカの中東政策の中のジェンダー・セクシャリティの動員については、他にも Gargi Bhattacharyya, *Dangerous Brown Men: Exploiting Sex, Violence and Feminism in the War of Terror*, London: Zed Books, 2008、Jasbir K Puar, *Terrorist Assemblages: Homonationalism in Queer Times*, Durham and London: Duke University Press, 2007などが分析している。
  - 10) 『ムスリム女性に救援は必要か』、55頁。
  - 11) 同上、57頁。
  - 12) 批判人種理論によれば、有色人種の権利は常に白人マジョリティの利益につながる場合にのみ承認されてきた (Mary L. Dudziack, *Cold War Civil Rights: Race and the Image of American Democracy*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2011) のであり、クィア理論は既存の司法制度、軍事制度、移民制度、福祉制度の不均衡は「それらをレインボー・フラッグで覆ったところで」解決しないことを訴える (Dean Spade, “Under the Cover of Gay Rights,” *NYU Rev. L. & Soc. Change*

- 37, 79–100, 2013, 98)。
- 13) 特に批判人種理論的議論については、“新ジム・クロー”論 (Michelle Alexander, *The New Jim Crow: Mass Incarceration in the Age of Colorblindness*, New York City, NY: The New Press, 2010; 『ムスリム女性に救援は必要か』77頁)をはじめしばしば直接言及されている。
  - 14) いくつか問題のある訳注もないわけではない。たとえば76頁で「アメリカ革命」について「\*南北戦争のこと」とあるが、これは明らかにアメリカ独立戦争のことだろう。訳注に疑問のある箇所についても先述の邦訳の問題点とあわせて訳者に連絡済みである。
  - 15) 本書の議論のもとになった論文「ムスリム女性には本当に救援が必要か」(Lila Abu-Lughod, “Do Muslim Women Really Need Saving? Anthropological Reflections on Cultural Relativism and Its Others,” *American Anthropologist* 104(3), 2002, 783–790.)が *American Anthropologist* 誌に発表されたのは2001年9月のテロから間もない2002年であり、本書の原書が出版されたのは第二期オバマ政権がスタートした2013年である。
  - 16) リベラルを批判するラディカルの立場を保守と親和的な反動的なものとしてみなし、両者が形成する「反リベラル連合」(井上達夫『普遍の再生：リベラリズムの現代世界論』岩波書店、2019、361頁)を批判する意見は、ミシェル・フーコーらを「青年保守派」として批判したハーバーマスをはじめ、リベラルの側から時折提出されているものである。フェミニズムにおいては、例えば、ジュディス・バトラーをそれぞれ「ユートピアからの撤退」(retreat from utopia)、「おしゃれな敗北主義」(hip defeatism)と批判したベンハビブ (Seyla Benhabib, *Situating the Self: Gender, Community and Postmodernism in Contemporary Ethics*, New York: Routledge, 1992, Chapter 7)、ヌスバウム (Martha Nussbaum, “The Professor of Parody: The Hip Defeatism of Judith Butler,” *The New Republic*, February 22, 1999.)の議論がよく知られている。
  - 17) Kota Oguri, *Sexual Occidentation and Its Consequences in LGBT Rights Politics: Reverse Orientalism, Homonationalism, and Postcolonial Homophobia*, MA Thesis. Ohio University, 2015. ([https://etd.ohiolink.edu/pg\\_10?::NO:10:P10\\_ETD\\_SUBID:102886](https://etd.ohiolink.edu/pg_10?::NO:10:P10_ETD_SUBID:102886))
  - 18) 『ムスリム女性に救援は必要か』、252頁。
  - 19) 上野千鶴子『女は世界を救えるか』勁草書房、1986、175頁。
  - 20) 『ムスリム女性に救援は必要か』、22頁。